

グランパのバケツトリスト

「コルビー、コルビー！」

コルビー・ユキコ・サカグチは、同僚のリンダに声をかけられ、我に返った。

「また、心ここにあらず、って感じね。本当に大丈夫？ 少し休暇を取ったらどう？」

「あ、ごめん……。あの、例のプロジェクトの件よね。大丈夫、進んでるから」

コルビーは、ほんの少しだけ口角を上げて、無理やりに笑みをつくった。

コルビーの祖父であるジエームス・サカグチが亡くなって二カ月が経とうとしていたが、コルビーはまだその悲しみから立ち直れずにいた。それどころか、その悲しみは日に日に深まっていくばかりだった。

コルビーは、ハワイで生まれ育った日系四世だ。結婚せずにコルビーを産み、シングルマザーとしてダブルワークで働く母に代わって幼いころから彼女の面倒を見てくれたのが、ジエームスだった。父親を知らずに育ったコルビーにとって、ジエームスはまさに父親そのものだったのだ。そのジエームスが癌に侵され、すでに手の施しようがないことが分かった日、コルビーはベッドに伏して涙が枯れるほどに泣いた。しかし、「その日」が来るまで、コルビーはジエームスとの時間を大切にしようとして、グランパの前では泣かない。いつも笑顔でいよう」と決めた。

以来、コルビーはジエームスとそれまで以上に多くの時間をともに過ごした。

「ベイビーガール」、ジエームスは二十八歳になるコルビーをいまだにこう呼んだ。十代の頃は気恥ずかしさもあって反発したもののだが、今ではジエームスの愛情表現なのだと捉えているし、ジエームスの病気が分かった今では、そう呼ばれる瞬間が愛おしかった。

「ベイビーガール、人生は驚くほど短いものなんだ。俺は……。おばあちゃんもだけれど、友達もたくさん見送ってきたし、ずんぶん長く生き過ぎたと思っていたよ。でも、今こうして自分の人生の終わりが見えると、『ああ、あれをしておくんだった』『てことが山のようにある。いつだって『今度でいいや』って後回しにしてきたからなんだよな。俺の人生は、『また今度』ばかりだよ。ベイビーガール、お前は自分のやりたいことは全部やりつくすんだよ」

ガサガサで皺だらけ、だけど大きくて分厚くて、いつも安心させてくれた優しい手で、ジエームスはコルビーの頭をポンポンと撫でた。

それから半年後、「その日」がやってきた。自宅リビングに置かれた介護用ベッドの上で、ジエームスは静かに息を引き取ったのだ。ジエームスの旅立ちには、一緒に暮らすコルビーの母だけでなく、叔父や叔母、いとこたちも姿を見せ、それぞれに感謝の思いを告げた。

覚悟はしていた。命の灯が少しずつ消えていく様子を目の前で見ていたから。コルビーは、意外にもジエームスの死を冷静に受け止め、葬儀までを泣くことなく過すことができた。

しかし、葬儀を終えてレンタルしていた介護用ベッドを返却し、いつものリビングルームに戻ってきたときに、それが「いつもの」ではないことにコルビーは気が付いた。テレビの前のソファ、ナスやキュウリを育てている裏庭の畑、パティオに置かれたテーブルセット。その中のどこにもジェームスの姿はなく、コルビーの「ただいま」に「おかえり」と応えてくれる声がないのを実感したとき、コルビーの目から涙があふれた。

その日から、寂しさと悲しみがコルビーを襲った。ジェームスが好きだったオックステールスープを食べるとき、一緒によく見た地元大学のバレーボールチームの試合がテレビで流れるとき、庭のライチの実がたわわに実ったときやアンセリウムが咲いたとき……。ジェームスと過ごした何気ない風景が、コルビーの胸の奥をチクリと刺し、涙が出てきた。

「ただいまー」

リンダから「もう今日は帰って休んで」と言われ、早々に仕事を切り上げて家に帰ってきたコルビーは「おかえり」という母の声に出迎えられた。

「ママ、珍しく今日は早いのね」

「ねえ、コルビー。おじいちゃんのもの、少しずつ整理しない？ まだあなたが辛いのはわかるけど……」

「そうだね……。いつまでも」のままにしておくわけにはいかないもんね」

コルビーは母と一緒にジェームスのベッドルームへ行き、飾り棚やクローゼット、机の上、引き出し中のものを一つ一つ取り出し、形見分けにするものと処分するものを分けていった。飾り棚の中には、祖母との結婚式の時の写真や、コルビーの母親が生まれたときの写真などの思い出のほか、日本旅行のおみやげと思いき博多人形やだるまなどの工芸品も並んでいる。

それから数日間にわたって、コルビーは仕事終わりに母とこの作業に取り掛かり、ジェームスの遺品を手取ることで少しずつ気持ちが落ち着いていくのが分かった。そして、机の引き出しを開けたとき、コルビーは古い手帳があることに気が付いた。十年以上は経っているであろう革の手帳は、いつだって物を大切にしてきたジェームスを象徴するかのようだった。

「ママ、これグランパの手帳？ 見てもいいかな？」

「いいんじゃないの」

「グランパって、手帳を持つてるイメージなんてなかったけど、きっと大切にしてたんだね」

表紙をめくると、そこには「バケットリスト（＝死ぬまでにやっておきたいこと）」が書かれていた。

「ママー！ これグランパのバケットリストだー！」

「何が書かれてるの？」

「えっと……。『血圧を気にせず、好きなだけマクドナルドのハンバーガーを食べる』だって。毎日通ってたくせにねえ」と、コルビーは思わず笑った。

「あと『猫を飼う』、んと……。これは『日本のウエダに行く』。ウエダってどこだろうっ？」

「さあ。調べてみたっ？」

コルビーはスマートフォンを取り出して、「日本」「ウエダ」と検索してみた。すると、画面には

「長野県上田市」が表示され「ノスタルジック・キャッスル・タウン」というウェブサイトにヒットした。「なんか、お城とかある場所みたい。この上田って場所、グランパと何か関係があるのかな？」
 「あなたの曾おじいちゃんは長野っていうところの出身だって聞いたことがある。もしかしたら、その上田っていうところなのかもね。大叔母さんに聞いておいてあげるわよ」

その翌日、コルビーは「やっぱり、あなたの曾おじいちゃんは、長野の上田出身なんだって。シモノゴウっていう場所だったみたいよ」というメールを母から受け取った。そして、ジエームスの言っていた言葉を思い出した。

「俺の人生は、『また今度』ばかりだった。ベイビーガール、お前は自分のやりたいことは全部やりつくすんだよ」

私がグランパの代わりに、上田を訪れてみよう。私にとってもルーツを知るいい機会になるはず。それに私も「いつか一人旅したい」って思ってたじゃない。今よ、コルビー……

しかし、日本に何の伝手もないコルビーは、何をどうしてよいものか途方に暮れた。そんなコルビーに、リンダがこう言った。

「ねえ、ソーシャルメディアを使ってみたらどう？ 上田のことをよく知っていて、発信している人に「コンタクトをとってみるの。ほら、さっき」れ見つけたの。『uedamore』って。個人アカウントみたいだから、もしかしたら協力してくれるかもよ」

「ありがとう、リンダ。ちょっと後で見てみるね」

その日、家に帰ったコルビーはそのソーシャルメディアアカウントを隅々まで見た。お城や情緒のある街並み、そして素晴らしい神社仏閣。コルビーがボスに十日の休暇を申請するのに十分な魅力がそこには詰まっていた。

そして「コルビー」は、「uedamore」へダイレクトメッセージを送ることにした。返事がなくてダメだ。

「はじめまして、uedamore さん。私はハワイで生まれ育った日系四世のコルビー・サカグチといえます。私の大好きな祖父が遺したバケットリストに『上田を訪れる』という項目がありました。私は祖父の代わりにその夢をかなえたいと思っています。大叔母に聞いたら、下之郷という場所に縁があったようです。そこはどんな場所ですか？ そこで見ておくべきものはありますか？ 私は上田に知り合いもいないので、こうしてメッセージを送りました。不快だったら「めんなさい」。また、この日本語はアプリを使って訳したので、日本語がおかしかったら「めんなさい」

少し緊張しながら「コルビー」は「送信」をタップした。すると十分後、「コルビー」のスマートフォンが鳴った。それは uedamore からの返信だった。

「はじめまして、コルビーさん。私は uedamore じゃ、大町リエといます。私のアカウントに興味をもってくれてありがとう。もし、上田に来るのなら私がいろいろ案内してあげますよ。少しなら英語も話せるし。なにより、あなたのおいさまを愛する気持ちに心打たれたから」

「マジ？」

思わずコルビーは声をあげる。

「ママ！ママ！私、日本に行く！上田に行ってくる！」

それから数日後、コルビーの姿は上田駅にあった。リエとの待ち合わせは、広いロータリーがある温泉口。七月の日本は湿気と暑さでうんざりする…と聞かされていたが、コルビーは上田に限ってはそれほどでもないな、と感じていた。すっきりと晴れた青い空、クリアな空気が気持ちよく、コルビーは大きく深呼吸をした。すると、背の高い、ショートヘアのよく似合う一人の女性が赤い車から降りてきて、こちらに向かってくる。

「コルビーさん…？」

「大町リエさんですか？」

「ああ！やっぱり！遠目からもなんとなくハワイの人っぽくなって思ったの。送ってくれた写真より、全然かわいい！あ、私のことはリエって呼んでくださいね。っていうか、コルビーさん日本語上手ね！」

一気に話すリエに多少圧倒されながらもコルビーは、

「グランパと私は半分くらい日本語で会話していたし、私自身子どものころから日本語学校にも通っていたの。ママは日本語が全然ダメだったから、グランパは私に期待してたのよね」と笑い、「だから話すのは大丈夫なの。でも読んだり書いたりするのは全然ダメ。私のこともコルビーって呼んでね」と握手のために手を差し出した。

リエはコルビーの手を握り返し、

「読んだり書いたりには私にまかせて、コルビー。じゃあ、早速行こっか」とはじけるような笑顔を向けた。

リエの車に乗り込んだコルビーは、車窓から上田の町並みを興味津々に眺める。川を渡って国道に向かうと、並走する線路を小さな電車がゴトゴトと音を立てて車を追い抜いて行った。

東京や大阪では見ないような電車だわ。かわいい…。

そんな風にコルビーが考えていると

「コルビーは昨日着いたのよね？上田の印象、どう？」と、リエが尋ねる。

「昨日は疲れていて、ほとんど外に出ていないの。リエはこの町の出身なのよね？」

「そう。大学だけは東京に出ただけだね。やっぱり上田が好きで戻ってきちゃった。それにね

…。高校時代から付き合っていた彼との間に子どもができたから」と、頬を赤らめる。

「私は二十八歳なんだけど、リエは私と同じ年くらいよね？結婚してお子さんもいるのね」

「私は三十歳だから、まあ、同年代よね。あ、結婚は…しなかったの。直前で彼が車の事故で亡くなっちゃってね…」

「Oh, so sorry」思わずコルビーは英語で返した。

「ありがとう。彼の事故は残念だけど、私は娘を授かる」ことができ、本当にラッキーだったと思ってる。彼の生きた証を遺せたわ。私の両親もとても協力的で、娘の面倒を見てくれているし、それはもうすばいかわいがりょうなの。本当にありがたいよね」

こんなに明るいうちにも、悲しい過去があるんだ…。

「コルビーは、そう思いながら視線をあげて空を見遣った。

「ここは空気がきれいで空が高いのね。見たことがない鳥も飛んでる」

「あれはオオタカかな。でも、滅多にみられるものじゃないのよ。きつとコルビーを歓迎しているのね」

カラリと晴れた青い空に舞うオオタカの姿に、コルビーはジエームスの姿を重ねた。

もしかして、グランパが心配してついてきてくれたのかな…。

コルビーは自然と笑顔になった。

十五分ほどすると、リエは車を止めた。

「コルビーの曾おじいちゃんは、下之郷の出身って言うていたわよね？」

「ええ。大叔母からはそう聞いているけれど、曾おじいちゃんはあまり自分の日本での生活のこゝと、自分の子どもたちにも話していなかったみたいで、グランパもよく知らなかったみたい。戦争とかもあって複雑な時代でもあったし、子どもたちをアメリカ人として育てたい思いが強かったんだと思うの」

「そっか…。この辺が下之郷よ。ここが一番有名なのが、この神社。生島足島神社いくしまたるとまっていうの」

「わあ…。立派ね」

赤々とした大きな鳥居を目の当たりにして、コルビーが言う。

「この神社はね、すべてのものに命を与える生島大神と、自分にはすべてのものがある…と足る、充分に持っているってことを知る足島大神を祀っているの。日本では、いろいろな神社仏閣で同じ神さまや仏さまを祀っているのだけど、生島大神、足島大神を祀っているのは、東日本ではここここ天皇陛下のいらっしゃる皇居だけなのよ」

「すごい神社なのね。私はグランパからいつも自分が持っているものについて、神さまに感謝しないさといっていわれてきたの。きつと、曾おじいちゃんの教えだったのかもしれないわね」

「コルビーは、大きな鳥居をくぐるとその造園の美しさに目を奪われた。左手には美しい色の鯉が泳ぐ大きな池がある。そして、前に視線を向けると朱色の橋と木の橋、ふたつの橋が本殿と参道を繋いでいる。そして、濃い緑色の木々の葉が夏の陽光でキラキラと光っていた。

「So beautiful」

「コルビーは、思わず英語でそつぷんやいた。

「コルビー、日本には来たことがあるのよね？」

「ええ。東京と大阪、京都、福岡には行ったことがあるんだけど、長野は初めて。もちろんお寺や神社にも行ったことがあるけれど、こんなに美しい場所があるなんて…」

「この池は『神池』、本殿のある場所は『神島』と呼ばれているの。神池が海、神島はこの日本列島をあらわしているんですって。私たち、地元民にとってはすごくなじみのある場所だね。私も小さいころ、おじいちゃんと一緒にお参りにきたなあ」

「リエのおじいちゃんは元気なの？」

「今は施設にいる。認知症になっちゃってね。もうお見舞いに行っても私のことわからないみたいで…。私もおじいちゃんが大好きだから、コルビーのメッセージを見たときにすごく共感できたの。さあ、お参りしましょう。まずはお清めね」

リエはコルビーを手水舎へと案内し、その作法を教えた。

「お参りの仕方にも作法があるのね。ハワイにも神社があつて行ったこともあるんだけど、この作法は知らなかった」

コルビーはリエのやり方を真似て、手を合わせた。

「何をお願いしたかは、自分だけの秘密にしておいてね。ここは、縁結びにご利益があるっていわれているから、きつと上田とのいい縁を結んでくれるはず。ところでコルビー、上田の滞在中はどくに泊まるの？」

「とりあえず今日と明日は駅前のホテルに泊まる。本当は、ゲストハウスみたいなところがよかつたんだけど、急に来ることを決めちゃったから…。この土地を歩いてみて、よさそうな場所があればトライしてみようかと思つて」

「ねえ、もしよかつたらうちに来ない？ まだ出会つて数時間しか経ってないけれど、私、コルビーのこと好きになっちゃつた。郊外だけど、うちには空いてる部屋もあるし、両親と娘もきつと喜ぶと思う。上田のロロの暮らし、体験してみない？」

「本當に？ ほんの？」

「Of course -。」

「ありがとう…。じゃあ、お言葉に甘えて明後日からお邪魔します」

「OK！ 今日はまだもう疲れただろうから、ホテルに送るね。明日もちよつと連れていきたいところがあるの。つきあつてくれる？ それから、ランチを一緒に食べよう。お屋前に迎えに来るね。家を出るときにメッセージする」

「ありがとう…。じゃあまた明日ね」

駅前でリエと別れたコルビーは、ホテルの自室ベッドに背中から倒れこんで目をつむつた。

今日もなんだか長い一日だった…。でも、リエはとても親切だったし、いい友達になれそう。あの神社もとってもきれいだつたし、この上田という場所でこんなことが起きるのか、ワクワクしてきたわ。

いつの間にか眠つていたのだろう。コルビーが目を覚ますと、外はもう白んでいた。

シャワーを浴びて身支度を整え、コルビーは駅前のレトロな雰囲気のお茶店でシンプルな朝食を取つた。そして、コーヒーに砂糖を入れようと砂糖壺に手を伸ばした時に、ふと気が付いた。

あ、この木彫りの鳥のシュガーポット、うちのテーブルにあるものに似てる…。グランパは、曾おじいちゃんが使つたものだって言つて、大事にしてたつけ。うちのは古すぎて顔もほとんど消えちゃつてるけど、この土地のクラフトなのかもしれないわね。

会計を済ませたコルビーは、少しだけ街なかを散策することにした。まだ開店前の店がほと

んどだったが、コルビーはスマートフォンアプリを立ち上げてカフェや居酒屋、雑貨店と思しき店の看板の意味を読み取りながら歩いて行った。そしてコルビーは、その中でもとても気になる店を見つけた。ジエームスの飾り棚のたるまによく似たそれが看板に描かれている。その名も居酒屋「たるま」だった。

グランパの飾り棚にあったたるまにそっくりでかわいい。今夜が駅前での最後の夜になるから行ってみようかな。

そんなことを考えているうちに、上田城が目の前に現れた。

お城自体はもうないのね。でも、この真田っていう名前、聞いたことがあるような…。グランパが見ていた時代劇に出てきた人かもしれない…。

スマートフォンで上田城についてのウェブサイトを読んでいたコルビーは、同じくスマートフォンに目をやりながら歩いていた女性とぶつかってしまった。

「ごめんなさいー」「Sorryー」

二人は同時に声を出し、微笑みあった。

「あら、外国の方？ 観光で来たの？」と、四十代半ばくらいと思しき女性は、顔にかかったサラサラの黒髪を手櫛で直しながら、流ちょうな英語でコルビーに話しかけた。

「ハワイから来ました。でも、観光というより、自分のルーツを探しに…。私は日系四世なんです」

「あら、そう！ なにか発見があるといいね。よい旅を」

きれいな人…。コルビーはその女性の背中を見送りながら、そう思った。

一通りの散策を終えたコルビーは、リエとの待ち合わせ場所である駅前ロータリーへ向かった。そこにはすでにリエが車の横に立っていて、コルビーの姿を見つけると大きく手を振った。

「ごめんなさい、待った？」

「うっん、さっき着いたところ。さあ、ご飯食べに行こう！ お腹すいちゃったー」

駅から少し離れると広がるのどかな田園風景。青々とした水田を眺めながら車を走らせる。

「これは、田んぼよね？ この辺はお米作りが盛んなの？」

「そうなの。上田は日本一雨が降らない場所なんだけれど、昔の人たちが知恵を絞ったため池をたくさん作って水を確保してね。そうやってお米の産地としてやってきたのよ。あまりにも雨が降らないものだから、雨「い」のお祭りもあるくらいなの。ちょうど、今度の日曜日にやるからみんなで見に行こうよ」

「楽しみー」

「さあ、ついたわよ。上田はおそばがおいしいの。アレルギーがなければ、ぜひ食べてみて。私、小さい時から「」の馬肉そばが大好きなのよ。馬肉って、馬ね」

「馬…。食べたことがないからトライしてみる」

すると厨房から女将が顔を出す。

「あら、大町さん久しぶり！こないだ大町さんがお店紹介してくれてから、これ見てきましたっていうお客さん増えてね。本当、ありがとね。あ、お友達？」

「そうなの。ハワイから来たコルビー。馬肉そばを食べさせたくて。二つ、もらえますか？」

注文から数分後、二人の前に馬肉そばが提供された。コルビーは恐る恐るスープを口にして、馬肉、そしてそばをすすった。

「フオー！おいしい」

「でしょう！よかった」

「コルビーちゃん、気に入ってくれた？うちはほかのそばもおいしいよ。あ、よかったらこれも食べてよ。遠くから来てくれたからサービスー」

そう言って女将は、コルビーたちのテーブルに天ぷらの盛り合わせを置いた。

「女将さん、ありがとー」「ありがとーございますー！」

「はいよー」、女将は厨房から元気な声で応える。

「あ、そうそう。昨日ね、両親と娘にあなたがうちに来ることを話したの。そうしたら、うちの娘、もう大はしゃぎ。あなたと一緒にやりたいこと、メモに書き出していた。彼女なりのバケツトリストね」と、笑う。

「バケツトリストがつかないでくれた縁ね。本当にうれしい。ところでこの後はどこに行くの？」

「さっき話した雨ごいのお祭りの会場にもなる別所神社。この神社には、神楽殿っていう舞台のようなものがあってね。そこから見える景色が、私、最高に好きなのよ」

リエが案内してくれた別所神社は、木々が生い茂り、参道には夏でもひんやりとした空気が流れていた。ほんの少しだけ息を切らせながら長い階段を上ると、開けた境内の右側にリエがお気に入りだという神楽殿が見えた。

「わあ、すごくきれいな…」

青々と輝く山々、そして温泉街が織りなす景色が、まるで一枚の絵ハガキのように美しい。

「上田には、昨日行った生島足島神社とこの別所神社、あともうひとつ信濃国分寺っていうお寺があるのね。それらは直線上に並んでいて、夏至と冬至には太陽がその線を光で照らすの。レイラインって呼ばれているんだけど。先人たちがどういった理由でこの場所に神社やお寺を建てたのかはわからないけれど、きっとここが特別な場所だったことはわかってたのよね。私は、そんな特別な場所で生きていくことができると本当に幸せ。だからソーシャルメディアでいろいろ発信しているの。そのおかげで、コルビーにも会えたしね」

その後も、リエは別所温泉にある寺院など、コルビーに上田のさまざまな景色を見せた。

「明日のチェックアウトは十一時よね？そのころに迎えに行くね」

リエは駅前でコルビーを降ろすと、運転席から手を振った。コルビーもそれに応えた。

その夜、コルビーは朝の散歩で気になった「だるま」という居酒屋に行ってみた。ドアを開けると、

大勢の客でにぎわっている。

「いらっしゃーいー」と迎えてくれたのは、朝、上田城でほんの少しの会話を交わしたあの女性だった。

「一人なんですけど…」

「あ、今朝の！なに！あなた、日本語流ちょうなんじゃない！あーっと。ごめん、今ね、満席なのよ。この席でいい？」

そう言って案内されたのは、カウンター前のテーブル席。すでに男性客と女性客が一人ずつ座っている。

「あー、この人たちは店の常連さん。嫌じゃなければどうぞ」

「いいですか？座って」と、コルビーが尋ねると

「おお、おいで、おいで」と、男性客が促す。

コルビーは、今朝の女性に「生ビールをお願いします」と、注文をする。

「はい。生ひとつね。ところで、名前、なんていうの？」

「コルビー・サカグチといいます」

「私は、マユミ。みなさん、コルビーちゃんよ。よろしくね。確かハワイから来たんだったよね？」
地元の客とみられる二人は、「遠いところからようこそ」「俺もハワイに行ったことあるよー」「いいなあ、行きたいな」などと口にする。そして、男性客が

「まあ、とにかく。ようこそ上田へ。まずは乾杯しようー！」

喉が渴いていたコルビーはビールを一気に流し込む。

「おお、いい飲みっぶりだねえ」

「次はどうする？」と、マユミがコルビーに聞く。

「いいよ、いいよ、マユミちゃん。コルビーちゃん、日本酒飲める？これ、俺のお気に入りなんだけど、よかつたら一緒に飲まない？」

「いいんですか？いただきますー」

「本当、神谷さんは美人に弱いわねえ」と、もう一人の女性客が笑う。

神谷と呼ばれた男性客がコルビーの猪口に酒を注ぐ。一口含んだコルビーは思わず「Oh my gosh…」と口にした。

「おいしいだろ？上田は米が美味くて、水も美味いから、美味しい酒ができるんだよ」

「ところで、コルビーちゃんは旅行で上田に来たの？あ、私の名前は陽ノ宮碧といいます」。

コルビーは、大好きだったグランパのこと、彼を亡くした後、自分が抜け殻のようになってしまったこと、グランパのバケツトリストに「ウエダを訪れる」とあったこと、大叔母の話ではサトウキビ畑で働くために移民としてハワイに渡った曾祖父が下之郷の出身らしいという話をした。

「ねえ、陽ノ宮さん。あんた役所に勤めてるんだから、なんか手がかりないの？」と、マユミが問う。

「うーん。ご本人だつて証明できれば戸籍をたどることはできるんだけど…。下之郷のサカグチさんねえ。戸籍をたどるのは難しいけれど、ちょっと明日役所で同僚たちに聞いてみるわ。知っ

てる人がいるかもしれないから」

その日は、酒だけでなく上田名物の「美味だれ焼き鳥」などを神谷と陽ノ宮に「ごちそうになつて、コルビーは「だるま」を後にした。

「コルビーちゃん、また来てね。ハワイに帰る前に必ずよ」というマユミの声に送られ、日本酒で上気した頬を夜風で冷ましながら夜の上田の街を歩く。

もしかしたら、陽ノ宮さんが會おじいちゃんの家を見つけてくれるかも……。私は、ここで家族を見つけることができるかもしれない……。

コルビーは、淡い期待を抱きながらホテルに帰った。

翌朝、ホテルをチェックアウトしたコルビーは迎えに来てくれたリエの車に乗り込み、リエの実家へと向かった。リエが両親、娘と暮らす家は、駅から三十分ほど走らせた郊外にあった。

「さあ、ごつぞごつぞ。古い家だけ」

平屋で立派な瓦葺きの屋根を持つ家には縁台があり、その下では猫が夏の日差しを避けるかのように涼んでいる。コルビーがこれまでの日本旅行では見たことがない牧歌的な風景が広がっていた。

「大きな家ね。日本の家って小さいってイメージがあつたけど……」

「まあ、ここは田舎だから。うちは小さいけれど田んぼと畑をやっているの。あ、カナコ、おいで」コルビーが振り向くと、そこには小学生くらいの子供の小さな女の子がはにかみながらコルビーを見ている。

「挨拶は？ あんなに楽しみにしてたのに、なに恥ずかしくてんのよ」と、リエが笑う。

「こんにちは。私はコルビー・サカグチです。お名前を教えてくださいか？」

「こんにちは……。私は大町カナコです」

「何歳ですか？」

「七歳です」

もしもいしながら答える姿がかわいらしいな……。コルビーは思わず笑顔になった。すると、

「あらあらあらあらー！ 遠いところ、よく来たねえ。コルビーちゃん？ さあさあ、早くあがんなさい。ほら、ほら……」

リエの母親が最大限の歓迎の意を表しながら玄関にやってきた。

「今ね、お昼飯つくってたのよ。暑いからそうめんねー。そうめんって知ってる？ 食べられるよね？」

「一気にまくしたてるところが、リエとそっくりだ。

「おーい、お母さん、お鍋、吹きこぼれてるぞー」

「はーい……うつかお父さん、止めるくらいできるじゃない？……もう、やあねえ。あははは」

「俺は今、天ぷら揚げんのに手がふさがってるんだって……」

そんな二人のやりとりを聞きながら、コルビーとリエ、そしてカナコはお互いの顔を見て笑った。「うちのおじいちゃんとおばあちゃんはいつもああなんだよ。たまにケンカしてるみたいに聞

「こえるけど、でも結構仲良しなの」

「ねえ、コルビー。おひるを食べたら、カナコも連れてシヨップングに行かない？ おみやげも買いたいでしょうっ？」

「そっね。お願い。いつもありがとう」

シヨップングを堪能した後、夕方になって家に帰ってきた三人は台所からの香ばしい匂いに顔をほころばせた。

「おう、お帰り。今日はさ、コルビーちゃんが来るって言ったら、友達が鮎を譲ってくれたんだ。食べさせてやってくれ、ってよ。今日釣ったばかりだってさ」

「わーい。カナコ、鮎大好きー！」

旬の川魚やリエの両親が育てた夏野菜などがずらりと並んだ夕食は、決して豪華とはいえないまでも思いやりにあふれた、家庭の味わいだった。

夕食後、はしやぎすぎて疲れ、眠ってしまったカナコをベッドに寝かせるとリエとリエの両親、そしてコルビーの四人の大人でテーブルを囲んだ。

「んじゃあ、そろそろ飲むか」

リエの父親が日本酒を取り出す。

「あ、私、昨日そのお酒を居酒屋で飲みました。すごくおいしかった」

「だろ？ 上田は米も水も美味いから、酒も美味いんだよ」

「居酒屋のお客さんもまったく同じこと言っていました」と、コルビーは笑う。

「まあ、今日は飲みすぎなさんなよ。明日は『岳の幟』たけのぼし見に行くんでしょ？ コルビーちゃん、お父さんに付き合って深酒することないからね」と、リエの母親が夫をたしなめる。

その夜は「もうちょっと飲もうよー」と粘るリエの父親を振り切って、コルビーはあてがわれた自室へと引き上げた。

「これ、お水。夜中にのどが乾いたら飲んで。足りなかったら、冷蔵庫にも何本か入ってるからゆっくり休んでね、コルビー。おやすみ」

「おやすみ、リエ。本当に何から何までありがとう」

リエがドアを閉めると、コルビーは畳の上に敷かれた布団に横になった。

畳の上の布団ってすごく新鮮。これが日本の生活なのね。そして、リエがどうしてここまで親切なのか、両親を見て納得したわ。すごくいい人たち。上田の人たちは本当に素敵な人たちばかり……。そんなことを考えるうちに、コルビーは眠りについた。

翌朝、コルビーが目覚めますと、目の前にカナコの顔があった。

「うわっ……びっくりしたー。カナコちゃんおはよう」

「おはよう、コルビー。今日は『岳の幟』たけのぼしだよ。早く起きて」

と、そこにリエがやってくる。

「カナコ…どこにいるのかと思ったら！ コルビー、おはよう。朝ご飯できてるよ。カナコ、あなたも早く食べちゃいなさい」

「はーん」

カナコは少し頬を膨らませて、ノロノロとリビングに向かっていく。

「顔を洗って着替えたら、私もすぐに行くわ」

コルビーは布団の上に座って、大きく伸びをした。

朝食を済ませた三人は、リエの車に乗り込み、別所温泉に向かった。

『岳の幟』の最終地点になっている別所神社は混むから、ちょっと早めに行ってベストポジションを確保しよう。私も今日の様子をソーシャルメディアに投稿したいし」

神社に着いて場所取りをし、しばらくカナコの学校のことやリエの仕事のことなど、とりとめのない話をしていると、お隣子とともに祭りの一行が境内にやってきた。

「このお祭りは五百年以上も続いているの。雨にいついこうとはこの前も伝えたと思うけれど、ある年の夏、大干ばつが起きてね。それで人々は夫神岳という霊山で雨乞いのお祈りを龍神さまにささげたの。そうしたら恵みの雨が降った、ってわけ。以来、そこに祠を建てて当時貴重だった反物をささげて、毎年龍神さまにお祈りをするようになったのよ。あの幟は青竹に反物を括りつけたもので、別所温泉地区を練り歩くの。そのほかにも女の子たちの踊りがあったり、獅子舞があったりするから、見て」

「あの幟、すごくきれいな。子どもたちもかわいいな」

お隣子に合わせて、地元の小学生の女の子たちが歌を歌い、ささらを鳴らしながら舞う。シヤン、シヤンという音が小気味いい、とコルビーは感じた。

「あのダンスはなんていうの？」

「ささら踊り。あの子たちが手に持っているのが、ささら。竹でつくったものなの」

その後、龍と獅子の仮面をかぶった三人が入ってきて、腰に付けた太鼓を打ち鳴らしながら舞を奉納する。

「圧倒される。こんなに素敵なお祭りがあるなんて知らなかった」

「ふん。国内でもまだそんなにメジャーじゃないから。でも、これからたくさん発信して、海外からのお客さんも増えたらいいなって思っている」

「本当に、素敵な体験をたくさんありがとう、リエ。私、この場所が大好きよ」

「私のほうこそ、上田を好きになってくれありがとう」

そしていよいよ、コルビーが帰国する日が迫った。

「リエ、私、上田の街なかにある居酒屋に行きたいの。』だるま』っていうお店」

「あ、知ってる…。地元の人たちでいつも混んでるよ」

「そう。このあいだ、常連さんたちのテーブルに案内されてごちそうになって。帰る前に挨拶したいの」

「O K。じゃあ、今夜はそこに行こう。でも、お父さん、コルビーと飲みたがってたから、帰ってきたら少し晩酌につきあってあげて」

「もちろんよ」

その夜、コルビーとリエは上田駅近くの居酒屋「だるま」へ赴いた。

「こんばんはー」

「いらっしゃい…あー…コルビーちゃんー」、「マユミが笑顔で出迎える。

「こちらはリエ。私の友達で、上田の出身です」

「あらー…いらっしやいー。よろしくねー。今日もこの席でいい？」

そこには、神谷と陽ノ宮、そしてもうひとりの男性の姿があった。

「あ、この人は美月さん。東京からの移住者で、この常連さんで映像の仕事してるのよ」とマユミは美月を紹介する。

「よろしく、コルビーさん」

コルビーは、美しい目をした美月という青年に目を奪われた。

「上田はどう？ 気に入った場所はある？」と、美月がコルビーに話しかける。

「神社やお祭り、たくさん素晴らしい場所に連れていってもらったけど、私はリエやリエの家族、そしてこの『だるま』にいる人たちがすごく好きです」とコルビーが答えると、

「わかるー。ここって特別だよね。俺も上田に来て人生変わったんだ」と、美月が笑顔に向けた。と、そのとき、陽ノ宮がコルビーの肩をトントンと叩いた。

「コルビーちゃん、下之郷のサカグチさんの件なんだけど。友達の伝手で何軒か見つかったんだけど、そのお宅からハワイに渡った人がいたかまでは確認できなくて…。ごめんね。帰るまでに見つけてあげられなくて」と陽ノ宮が言うと、コルビーは、

「全然いいんです… また上田に来る理由ができたわ」と、美月のほうをちらりと見遣った。

「理由なんていらないから、いつでも戻ってきてよ。っていうか俺が会いに行くか」と、神谷が笑う。

「なんか本当にやりそう。怖い、怖い」とマユミが言うと、テーブルにいた誰もが笑った。

「だるま」で食事を済ませたコルビーとリエは、リエの実家に戻った。

「おう、待ってたぞ。コルビーちゃん。お父ちゃんと飲もう」

リエの父親が日本酒の瓶をかざして言う。リエの母親が漬けたためか漬けを着しながら酒を飲み、四人がほろ酔いになったころ、コルビーが口を開いた。

「私ね、自分のパパが誰なのか知らないんです。私のママは結婚しないで私を産んだし、パパのことは話したがらなかったから、私はママの方の血筋しか知らないの。いつも仕事でいないママに代わって私を育ててくれたグランパが死んじゃって、とにかく悲しくて。グランパのバケットリス

トを見つけたときに、グランパがしたかったことを私が代わりにしてみたら、喜んでくれるかもしれないって思ってた。それに、グランパの訪ねたかった場所に興味がわいて、この上田に来ました。そうしたら、もしかしたら家族が見つかるかも、っていう話にまでになって。結局、曾おじいちゃんの家は見つけられなかったし、私の家族は見つからなかったけど。見ず知らずの私にこんなに優しくしてくれる人たちがいて、グランパの優しさは、この土地で生まれ育った曾おじいちゃんから受け継いでるんだってわかった。グランパも、私も、上田にルーツがあって、幸せ。本当に、本当に、ここにきてよかった。ありがとう」

「ちよっと！ コルビーちゃん！ 家族が見つからなかったなんて、何言ってるんだよ！ もうあんたは私たちの家族だよ。こうやって、家でご飯一緒に食べて、くだらない話して笑いあえたら、もう家族なんだよ。だから、いつでも帰っておいで。ね？」

リエの母親が目を潤ませながらそう告げると、リエの父親は

「おう、そうだ。もうコルビーちゃんは俺の娘だ。うちは本当に女だらけの家だな」と言って豪快に笑った。

そしてその翌日、コルビーは荷物をまとめ、リエの実家を後にすることになった。リエは車を玄関横につけ、駅まで送る準備をしている。コルビーとの別れがさみしいカナコは、朝から自室にもったきりだ。

「カナコ…… もうコルビー帰っちゃうよー。本当にいいの？」

リエがカナコの部屋のドアをノックしながら話しかける。すると、目を真っ赤にしたカナコが飛び出してきて

「コルビー、本当に帰らなくちゃダメなの？ うちの子になってもいいよ？ 私のお姉ちゃんにしてあげる」と、コルビーに抱き着いた。

「カナコちゃん、必ずまた帰ってくるから。だって、私にはもうここに家族がいるんだもん。だから、帰ってくるよ、絶対に。そのときは、おかえりって言ってくれるかな？ 私、ただいまって言ってもいい？」

「うん…… わかった。じゃあ…… 今は…… 行ってらっしゃい」と、カナコは泣きじゃくりながら応える。

「おう、コルビーちゃん、行ってらっしゃい」

「さよなら」

コルビーは、目に涙を浮かべながら「うう言った。

「はい…… 行ってきます……」

抜けるように青い夏の空には、オオタカが円を描くように飛んでいる。その姿はまるでシエームスガ「いい旅だったかい？ ベイビーガール」と問いかけているようだった。